



栃木県 那須塩原市

IT活用事例 | 那須あいクリニック

院長 / 久光 愛氏

稼働電子カルテシステム

Hi-SEED W3 EX
(日立ヘルスケアシステムズ)

めざすは“地域のかかりつけ医” 専門医が選ぶ電子カルテの要件は 医療機器との連携と業務の効率化

一般的なねんざ・スポーツ外傷・腰痛・変形性の関節疾患・むちうち・打撲などに悩む地域の人々のかかりつけ医を目指して開院した那須あいクリニック。へき地医療の経験を持つ久光 愛氏が院長に就任し、運動器への超音波を活用する先進的な診療など、非常に高品質な医療を展開している。同クリニックでは、MRIや超音波装置以外にも自動精算機など、診療全体の効率化を図る装置を導入すると共に、日立ヘルスケアシステムズの電子カルテシステム「Hi-SEED W3 EX」を中心に、各種医療機器やリハビリ部門等との連携を密にした医療IT環境を構築した。久光氏は「今後は、医療ITをより有効活用して地域医療に貢献していきたい」と話す。

“地域のかかりつけ医”を目指し 患者ごとに対応した医療を展開

——院長になられた経緯と新クリニックの特徴についてお聞かせください。

医療法人さつき会は、栃木県宇都宮市内で倉持整形外科・内科として開業し、“地域のかかりつけ医”となることを目指して、患者さん一人ひとりに心のこもった信頼の医療を提供し続けてきました。その、さつき会は2018年6月、那須塩原の地に新たなクリニックとして「那須あいクリニック」をオープンさせ、高齢化が進んでいるこの地域の“身近なかかりつけ医”となることを目指しています。私はへき地での総合医としての経験を持っていたことから、倉持大輔理事長からの誘いを受け、当クリニックの院長として勤務することとなりました。

当クリニックの特徴ですが、整形外科での診療に運動器超音波を積極的に活用していることが挙げられます。以前は、整形外科医が超音波装置を用いるというバックグラウンドはありませんでしたが、軟部組織の評価ができること、疼痛部位へのより正確な注射を実現できること等から、10年ほど前から徐々に広まりつつあります。

私も、学会で超音波装置の活用を知り、

自己研鑽を積んできました。

例えば、首の神経根ブロックへの注射などでも、超音波を用いれば注射すべき部位を正確に捉えることができるのです。注射針の先端部も映るので針が正確に注射ポジションに達しているかを容易に把握でき、疼痛緩和に劇的な効果を挙げることが可能です。

超音波装置を使う以前の私であれば、痛み止めの薬と湿布薬だけで対処し、患者さんに満足のいく治療が十分にできていなかったでしょう。しかし、現在は、患者さんが最も困っている“痛み”に対する治療の選択肢も増え、診療スキルが大幅に上がったと自負しています。

なお、整形外科領域における超音波の活用は、すでに韓国では国家試験に出題されるなど、国際的にもメジャーになりつつあるので、日本でも遅からず普及してくるのではないかと感じています。

画面設定の自由度と高い操作性、 機器との連携機能を高く評価

——開業から半年が経ちましたが、診療の現況についてお聞かせください。

最初の週は1日30人程度の患者数だったのですが、週を経るごとに患者数が増え続け、現在では1日の患者数は約120名にもなります。患者さんは、腰や肩、

首の痛みを主訴とする高齢の方が多く、他にもスポーツ傷害の小児患者さんが若干名通院しています。注射による疼痛緩和の効果が口コミで広がっていることもあって、先に述べたとおり、急速に患者数が増えてきていますね。

——クリニックのIT化と電子カルテ選定のポイントについてお聞かせください。

開業に際しては、リハビリ環境を充実させるとともに、整形外科領域における総合的な診療を行えるように、X線撮影装置やX線骨密度測定装置、MRIも導入しました。MRIは倉持理事長の決断で導入を決めました。実際、開業後MRI検査は意外に多く、今では予約・緊急撮影の患者を含めて1日5件程度の検査を行うようになっています。

なお、これらのモダリティをスムーズに連携させるためには、IT化が必須の要件であることは自明であり、そのためのソリューションの選択には大きく留意しました。

なお、事務スタッフの労働負担と、患者さんの診察終了後の待ち時間軽減のために、自動精算機の導入も当初より決めていました。

そして、これらの医療機器や、自動精算機など、さまざまな装置との連携がスムーズに図れる電子カルテを検討した結果、日

Clinic Information

那須あいクリニック



住所：栃木県那須塩原市沓掛3-12-2
電話：0287-74-3888
標榜科目：整形外科・リハビリテーション科・内科

各種機器やリハビリ施設等、充実した設備を整備 気軽に受診できるような建屋と駐車スペースを確保

栃木県宇都宮市で倉持整形外科・内科を開業している医療法人さつき会は、運動器への超音波を活用した診療を行う久光 愛院長を迎えて、同県那須塩原市に新クリニックをオープン。

MRI、超音波装置をはじめとする医療機器はもちろん、リハビリ器具も多数揃え、専門的な診療体制を力強く支えている。JR那須塩原駅近くの交通量の多い県道沿いにあり、広い駐車スペースを確

保して車による来院の便宜を図るなど、地域の人々が気軽に受診できるよう配慮されている。

スタッフは、久光院長のほか、倉持大輔理事長を含め非常勤医2名が週に1日勤務する。その他、看護師4名（常勤3名、パート1名）、リハビリ部門スタッフ2名と事務員が3名、そして診療放射線技師1名を加えた14名が勤務している。外来患者数は、1日約120名。

カルテ入力画面



3列表示のインターフェースを使用。診療科や医師の要望に応じた画面や機能のカスタマイズが可能。一覧性の高いインターフェースを実現できるほか、薬剤のアラート機能など、診療に役立つ機能を多数搭載している



クリニックに設置されている自動精算機。電子カルテおよび会計システムとシームレスに連携、事務職員の業務負担削減に貢献している



リハビリ室の電子カルテ端末。リハビリテーションの予約管理が可能。カルテ画面を通じ、患者の状態をリアルタイムにチェックできる



X線骨密度測定装置「DCS-900FX」と一般撮影X線装置「Radnext32」のコンパクト性を生かし、検査室を1部屋にまとめて省スペース化を実現

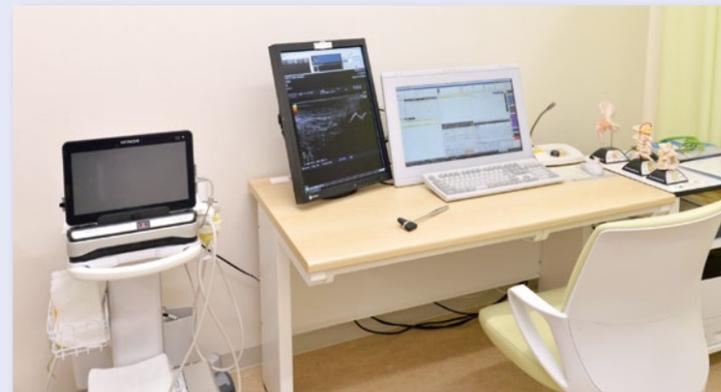


永久磁石型0.3TオープンMRI「AIRIS Vento」を設置。同じ日立製であることから電子カルテとの親和性は非常に高いレベルにある

那須あいクリニック システム構成図



電子カルテ端末は、診察室や受付、リハビリ室をはじめ、10台を設置。院内各所で診療情報のシームレスな連携を図っている



診察室では、電子カルテとPACS、超音波画像診断装置と連携し、医用画像関連情報も容易に閲覧できる



受付に置かれた電子カルテ端末。レセプト院内審査支援システム「べてらん君Collaboration」を標準搭載し、医療事務員の業務負担を軽減

立ヘルスケアシステムズ製の「Hi-SEED W3 EX」を採用するに至ったのです。——「Hi-SEED W3 EX」の使い勝手や評価する機能についてお聞かせください。「Hi-SEED W3 EX」は、パネルの色や表示形式、配置を自由に切り替えて画面構成のカスタマイズが可能であることは知っています。さらに、パネルに思い通りの項目を入れて配置できるなど、自分好みの電子カルテ画面を作ることができるといことも同様です。しかし、残念ながら診療が多忙なこともあって、自分流の画面構成にレイアウトを作る作業が捗っていません。知らない機能も多く、まだ電子カルテを使いこなせているとは言えないのが現状です。ただ、基本的な電子カルテ機能には満足しており、カスタマイズなしでも診療に支障をきたすこ

となく運用できています。なお、診察室に設置した大型のタブレット端末は画面が大きいので見やすく、患者さんの主訴や経過、アレルギーや既往歴といった基本的な情報は、受付の時点で事務スタッフが入力してくれますし、診察室にも医療クラークを配置していることから、電子カルテへの入力の労苦は大幅に軽減されていますね。また、モダリティとの接続も良好で、患者属性情報の送信やオーダ連携、画像データの取り込みなどを簡単に行うことができ、入力作業が簡便になるなど、診断業務の効率化に貢献していると言えます。診療放射線技師からは、モダリティが日立製で統一されていることもあって、とても使いやすいと聞いていますね。お気に入りの機能としては、電子カル

テ画面の上部に表示されるメモ機能が挙げられます。カルテに記載する診療記録ではなく、例えばMRI検査などの撮影に対する注文や、スタッフ間での連絡に活用しています。声を発することなくスタッフに連絡できるので、患者さんに聞かれては差し支えがあるような内容の情報も簡単にやり取りでき、とても重宝しています。事務面でも、レセプト院内審査支援システム「べてらん君Collaboration」が役立っているという声をスタッフから聞いています。事務スタッフには、医療事務は初めてという人もいますし、このようなソフトウェアによるフォローは有り難いです。事務面では、先述のとおり、自動精算機による会計支援も行われているため、事務の手間もかなり省力化され

ています。——システム導入に際して、ベンダの対応はいかがでしたか。システムは安定した稼働を続けており、大きなシステムトラブルはありません。電子カルテの経験はありますが、決してITに精通しているわけではありませんので、電子カルテ導入に際しては、日立ヘルスケアシステムズの担当者が果たした役割は大きかったと感じています。一方、まだ電子カルテを十分使いこなせているとは言えません。私自身も、機会を見つけ次第、機能を整理したり、自分流のセットメニューを作成するなど、より使いやすいようシステムをリファイ

ンしたいと思っています。——医療ITの活用を含め、今後の展望についてお聞かせください。当クリニックでは、前述のとおり、現在1日約120名の患者さんが来院されていますが、1人の常勤医で診療する件数としては、これが限界と感じています。当クリニックは交通量の多い道路に面しているのですが、待合室や駐車場の状況を見て、帰られてしまう人も多くおられます。また、当クリニックには手術室も設置して、日帰り手術なども可能な体制を整備しているのですが、一般診療の患者さんが多く、そこまで手が回らず、診療の幅を広げられないのが実状です。こうした現状について、マンパワーを増やす対応も考えられますが、一方で、

まだ使いこなせていない電子カルテを含めた医療ITを積極的に活用することで、医療者側に“ゆとり”を作ることができないかと感じているところです。

Doctor

久光 愛 (ひさみつ あい) 氏
自治医科大学医学部卒。さいたま赤十字病院、国保町立小野中央病院、自治医科大学さいたま医療センター、秩父市大滝国保診療所、国際医療福祉大学病院勤務を経て、2018年6月さつき会那須あいクリニック院長に就任